

玉藻前説話における王権

——三種の宝物と歴史的背景から——

武 居 真 穂

はじめに

玉藻前説話は南北朝時代成立とされるお伽草子であり、『たまものさうし』や『玉藻前物語』として知られる。

玉藻前は久寿元年（一一五四）、鳥羽院の仙洞に現れた妖狐で、その美貌と聡明さで院を虜にする。しかし二人が契りを結ぶと、院が病にかかってしまう。院の命令により、玉藻前は陰陽師・安倍泰成によって正体を暴かれ、有力武士の三浦介と上総介に討伐される。その死骸からは仏舍利・如意宝珠・赤白の針が出て、仏舍利は院、如意宝珠は三浦介、針は上総介の取り分となる。玉藻前の霊は那須野へ行き、触れると人間や動物が死ぬという殺生石になったが、通りかかった曹洞宗高僧・玄翁和尚の供養により成仏する。

美濃部重克氏が「玉藻前」は、妖怪の変化である不思議な美女による王法の危機とその護持を主題とする物語」と述べるように、玉藻前説話は単なる怪異譚ではなく、政治や王権の要素を含んでいる。また、三種の宝物についても、仏舍利が王権の象徴であることや鳥羽院が如意宝珠に関心を持っていたことなどが指摘されている²⁾。本稿では、玉藻前説話で描かれる鳥羽院の時代や三種の宝物の意

味を再考し、本作品と天皇の王権との関わりについて具体的に考察する。さらに成立時期とその後の享受の問題にも触れ、なぜ本作品が成立し、どのような目的で享受されたのかを考えたい。なお本文の引用は、横山重『室町時代物語語集第四』（井上書房 一九六二年）所収の「たまものさうし」を用い、表記は私に改めた。引用文中の傍線もすべて私に付したものである。

一 三種の宝物とその分配

本作品の大きな特徴の一つに、玉藻前が退治された後の場面が挙げられる。

狐の腹に、金の壺あり。中に仏舍利おはします。これをば院に進上す。額に、白き玉あり。夜昼照らす玉なり。これをば三浦介取るなり。尾先に、二つの針有り。壹つは白し、壹つは赤し。これをば上総介取りて、赤針をば氏寺、清障寺に納むる。

妖狐の死骸から「仏舍利」「白き玉」「二つの針」が出て、仏舍利は鳥羽院、玉は三浦介に渡り、針を上総介が取って赤針を氏寺に納め

ている。白針については「その時平家を恨み申すことあるによりて、伊豆の兵衛介に参らせたり」とあるように、兵衛介（源頼朝）に渡る。⁽³⁾本節では三種の宝物とその分配が何を示しているのかを考察していきたい。

① 仏舍利

南北朝時代の東寺の寺誌『東宝記』第二には、宝蔵に納める仏舍利について「天下豊饒之時、分布倍增。国土衰危乃時、粒数減少」、『法華經鷲林拾葉鈔』卷十には、「鎌倉中ノ富貴スル事ハ依^二此舍利威驗^一歟。近年紛失ス。其後衰微スト申傳タリ」とあり、これらの記録から、仏舍利の有無や量が国の盛衰を表すとされていたことが分かる。東寺長者が勘計した仏舍利を院に分割し、それを院が公家・武家、寺院の人々に分与して權威を示す「舍利奉請」という儀式があったことも知られている。⁽⁴⁾中世において仏舍利は王權の力を示し、それを分配・継承するものであった。

では、玉藻前説話において仏舍利は何を意味しているのだろうか。ここでは、仏舍利を保持した女性という点から検討したい。

まず仏舍利を与えられた女性に、後鳥羽院寵後の伊賀局亀菊がいる。亀菊は院の寵愛により後鳥羽院領摂津国長江・倉橋両荘の領家職を与えられたが、鎌倉幕府から任命された地頭に年貢を抑留されたため、院に訴える。院は地頭の罷免を幕府に要求したが認められず、倒幕の意志を固くした。これが承久の乱の原因とされる。その亀菊が院の形見として仏舍利を与えられる記録が「東寺御舍利相伝次第」⁽⁵⁾にある。白拍子出身でもあった彼女は、性的な魅力で院に近付き寵愛され、仏舍利を与えられるほどの身分になったのである。

また、「広隆寺文書」の仏舍利に関する文書には、法華寺の尼たちに関わる記録がある。⁽⁶⁾法華寺は、天皇家の乱倫に関わった女性たちを収容する場所であった。つまり法華寺の尼たちは、天皇や上皇と性的な関係を持った妻后や妾ということになる。以上から、女性にとつての仏舍利は天皇や上皇との性的な関係を経て得られた権力の象徴であると分かる。

仏舍利を保持した女性として、本作品と最も関わるのが鳥羽院后・美福門院（藤原得子）である。美福門院は鳥羽院から寵愛を受けて近衛天皇を生み、後白河天皇を即位させて保元の乱の原因を作ったとされる。さらに、『大乗院寺社雜事記』文正元年（一四六六）閏二月四日条によると、仏舍利が白河院―祇園女御―鳥羽院―美福門院―八条院と相伝されている。⁽⁷⁾以上から、玉藻前に重なるところがあるとされてきた。

美福門院は、鳥羽院の他の后である待賢門院や高陽院のように高貴な身分ではなかったにも関わらず、⁽⁸⁾院の寵愛によつて女御、皇后へと昇進した。玉藻前説話にも、玉藻前の身分について述べられる箇所がある。玉藻前は病にかかった鳥羽院に対し、

我等いやしき凡夫、冠弱の身として、かたじけなくも、昇殿を許され、参らするのみにあらず、あまつさへ、御寵愛を被り、龍顔に近付き奉る事、前世の宿縁と申しながら、過去の戒行ありがたく候ふ。

と言う。また、安倍泰成が、泰山府君祭で玉藻前に幣取りの役をさせようとすると、「その身はいやしと申せども、かたじけなくも、

龍顔に近付き奉るものなり」と言い、身分の低い者がすることだからと幣取りの役を断る。これらの発言から、もとは「いやしき」身分であった玉藻前が、「かたじけなくも」寵愛を得て、院に近付いたことが読み取れ、この点でも美福門院と共通する。

中世における仏舍利と、それを保持した女性たちの存在から考えるなら、本作品での仏舍利は、玉藻前が性的な魅力で院に近付くことで奪った院の王権の象徴と言って良い。

②如意宝珠

如意宝珠は、阿部泰郎氏が「舍利以上の速疾な効験を、臨時の、しかも王の危急の際にもたらす」と述べているように、仏舍利と同等、あるいはそれ以上の効能を持ち、王権の力を示すものであった。玉藻前説話に登場する「玉」は如意宝珠を指すとされる¹¹⁾。

本作品の問答の場面では、鳥羽院が「よろづの玉の中には、何れの玉を、精とすべく候ふかな」と尋ねると、玉藻前は「如意宝珠を精として候ふ」と答える。つまり「如意宝珠」＝「精」となる。では、「精」とは何か。「精」の意味を考えるにあたり、『溪風拾葉集』の愛染明王に関する口伝を挙げる。そこには、「手ニ有情ノ靈精ヲ拳平等ニ天下ノ接領スル也。摂祿ノ天下ヲ掌中ニ拳テ萬人攝伏スル事。深可レ思レ之。所以ニ愛染ノ王ハ以ニ如意寶珠ヲ爲三摩耶形」とあり、愛染明王が「有情ノ靈精」＝「如意宝珠」を持つとされる。「有情」とは、感情など心の働きを持っているいっさいのもの、「精」は、生命の根源、また男子の精液という意味である。つまり「有情ノ靈精」とは「生きとし生けるものの生命の根源」と言える。

愛染明王は、愛欲を本体とし煩惱を菩提に転ずる真言密教の神で

あり、これを本尊とする修法に愛染法がある。愛染法では息災・増益・敬愛・降伏が求められ、敬愛法が「煩惱即菩提」（煩惱も菩提も真実のものであるから二つは一体であるという考え方）を説くことされた。また、如意宝珠を本尊とする修法でもあった。

玉藻前には、愛染明王を思わせる要素がある。先にも挙げた問答の場面に、「煩惱即菩提」という語が見られる。鳥羽院が、

そもそも聖教の中に、煩惱即菩提、生死涅槃と云へり。日々夜々に起こる所の念は、皆これ煩惱なり。無辺生死とは、この煩惱を働かさずしてすぐに菩提に至り、涅槃を生ずべきか。

と問う。「生死涅槃」とは、生死流転の迷いと、「涅槃」（煩惱がなくなり悟りの智慧を完成した境地）の併称である。煩惱即菩提、生死涅槃という考え方もあるが、煩惱を起こさずすぐに菩提の念を起こすべきかと尋ねている。これに対して玉藻前は、

煩惱と、菩提と、生死と、涅槃は、たとへば水と氷のごとし。声と響きのごとくなり。煩惱即菩提なりといへども、思ふにまかせて煩惱を起こせば、煩惱いよいよ増長す。煩惱生死なるがゆへに、心にまかせて着心をなせば、生死いよいよつくる所なり。（中略）ひとへに菩提起こすべし。

と、煩惱も菩提も水と氷や声と響きのように元は同じ、すなわち「煩惱即菩提」とはいえ、煩惱ばかりでなく菩提を起こすことを勧めている。

本作品における如意宝珠は、「精」すなわち生命の根元としての力を表している。さらに、それは菩提に変わり得るエネルギーを秘めた煩惱(とりわけ愛欲)に通じている。玉藻前は鳥羽院と契ることで、院の「精」(表面的には精液、内面的には生命の根元としての力)が込められた如意宝珠を奪った。玉藻前と契った後、院が病気になる理由も、玉藻前に「精」を吸い取られたからであろう。本作品における如意宝珠は、院の「精(性)の力」の象徴であると考えたい。

③針

玉藻前の死骸から出た赤白の針は上総介が取り、赤針は氏寺・清澄寺に納め、白針は平家を恨む源頼朝に渡している。なお、この「上総介」に相当する人物には、頼朝に従った平広常が考えられる。

中村禎里氏は針について、記紀神話のヤマタノオロチの尾から出た天叢雲剣から着想したものであると述べている。しかし、針の色と、なぜ剣ではなく針であるのかについては言及していない。

針の赤白という色に関しては、胎生学の影響がうかがえる。『摩訶止観』第七・上に「赤白二滯和合^{シテ}託^ツ識^ヲ其^ノ中^ニ。以^テ爲^ス體質^ト」とあるように、中世では「父母の精」を「赤白二滯」という言葉で表し、赤(母の経血)と白(父の精液)が結合することで託胎すると考えられていた。赤白という色は胎児を生み出す父母の精(性)の力を表しており、仏舍利や如意宝珠と同じように鳥羽院と玉藻前の性の力を示しているのではないだろうか。

針そのものの意味を考えるに際しては、「苧環型説話」との類似性を視野に入れるべきであろう。毎夜通って女を妊娠させた男の正

体を探るため、男の着物に針を刺しておき、翌朝その糸をたどって男の素性(大蛇)を知る、という筋書きの「苧環型説話」は、「三輪山伝説」「蛇婚入り譚」などとして上代から存在する。狐は黄色い毛や稲穂に似た尾から農耕や豊穡と関係する一方、蛇も鼠から穀物を守るため、田の神として祀られたという点で両者には共通点がある。針と狐については、針供養の日が初午の稲荷の日に近いこと、稲荷神は金工業者の守護神であることなどからの関連が指摘できる。中世の「苧環型説話」で有名なものとして、『源平盛衰記』「大神官勅使^附緒方三郎平家を攻むる事」が挙げられる。この話では後白河天皇が「平家追討の御祈りの為に」九国の武士に召集の命を下す。院宣に従った緒方三郎惟義は、「大蛇の末」である強い武士であった。惟義が「大蛇の末」である所以として次のように語られる。

昔、花御本という女のもとに毎夜男が通い、身ごもった。彼女が男の狩衣に苧環の糸を付けた針を刺して糸をたどって行くと、竈嶽という山に着いた。穴の中から大蛇の声が聞こえ、あごに刺さっている針を抜いて欲しいという。針を抜くと大蛇は喜び、「お前の胎内には男子が居り、十カ月で生まれればその子は日本の大將となり、五カ月で生まれれば九州の有力武士になるだろう」と言って死んだ。花御本が生んだ男子の五代目の子孫が惟義である。惟義は大勢の武士を引率し、「速かに平家を追い出し奉るべし」という思いで、平家側を太宰府落ちに追いやる功績を遂げた。

この出生譚において、針を介した男女の間に生まれた子とその子孫が大きな力を持っている点は重要であり、本作品における赤白の針も、院と玉藻前の「性の力」を内包したものと見ることができ

惟義は平家を敵とする強い武士であることから、針が上総介と源頼朝という源氏方の人物に渡ったことと関係する可能性がある。

④宝物の分配とその意味

ここまで、仏舍利は玉藻前が「性の力」によって奪った院の王権の象徴、如意宝珠は院自身の「性の力」、針は院と玉藻前の「性の力」を内包したものであることを明らかにした。それぞれが「性の力」にまつわることは次節で触れることとし、ここでは三種の宝物の行き先が表す意味について検討する。

玉藻前の退治により仏舍利は院に返還されたが、如意宝珠と針はどう捉えるべきか。これについては、武士と天皇の関係から検討する必要がある。

まず、玉藻前を退治する前の場面で、

この比、東国の大名の中に、重代の弓取りと申すは、上総介、三浦介、兩人こそ候へと申しける。さらばとて、直に院宣を成し下さるる。

と、両介が「院宣」によって招集されている。さらに両介は、

行水をして装束を着し、庭上にひざまづき、三度拝し奉り、これを受け取り、拝見して、すなはち一門をもよほし申しふるる。ことごとく馳せ集まって評定して曰はく、東国に武士多しといへども、身に当てて院宣を下さるる事、家の面目、これに如かじ。

と、「院宣」を大変ありがたがり、名譽なこととしている。ここでの両介はあくまで院の統治下であり、院と敵対はしていない。そもそも武士は、上代から宮中を警固する役を担い、平安時代末期には天皇の武力として組織され、その功により昇進していた。一方、天皇側は王朝国家財政に行き詰まり、武士の官職を売官していたという。¹⁵つまり、天皇に国政を担うような政治的実権はなかったが、武士にとっては、いわば「天皇のお墨付き」の官職には価値があり、自身の権威付けのために天皇の権威を求めていたのである。如意宝珠と針が渡った武士と幕府は、天皇の王権を奪ったのではなく、天皇の王権の一部を補完する存在と見ることができ、三種の宝物が院と院の王権を補完する武士に渡ったことは、不安定になっていた院の王権回復を示唆している。

二 成立時期と成立の背景

玉藻前説話の舞台は鳥羽院晩年の時代である。久寿二年（一一五五）に近衛天皇が崩御し、保元元年（一一五六）には鳥羽院が崩御、さらに保元の乱が勃発する。玉藻前が現れた久寿元年（一一五四）は、乱世直前の混乱期ということになる。

本作品で鳥羽院の王権について言及されるのは玉藻前が退治される直前の箇所である。

昔、延喜の御門の時、王威のほどを、知ろしめさんために、池のほとりに、鷺の居けるを、六位を召して、「あの鷺を取りて参れ」と勅定有りければ、六位走りより、鷺すでに立たんと、

羽をつくるふ所を、「宣旨ぞ」と云ひければ、この鷲、羽を平めて、捕られにけり。その後、「まるが威徳を、あらはしたる鳥なれば」とて、「汝は今より、鳥の中の王たるべし」とて、五位に成してぞ、放たれけり。それより鷲を、五位と申すとかや。王位の重き事、かくのごとし。なんぞ昔に、相劣るべきや。

覚一本『平家物語』巻第五「朝敵揃」による、六位の者には捕らせなかつたが綸旨には平伏し捕えられた鷲の話を引き、醍醐天皇の御代と比べて鳥羽院の権威が失墜してしまったことを示唆している。さらに玉藻前が退治された後、

希代不思議の化性のもの、叡慮を悩まし奉り、その身も滅び朝威を軽しめ奉る事、神明の加護、王法の威徳、無からんかな。上古も末代もためしなかりし事どもなり。

と、鳥羽院が「化性のもの」（玉藻前）によつて病になり、朝威が軽んじられたことは王法の威徳がないからだ、このような例は過去になかつたとされている。

慈円は『愚管抄』巻四で、

保元元年七月二日、鳥羽院ウセサセ給テ後、日本國ノ亂逆ト云コトハコリテ後ムサノ世ニナリニケルナリ（中略）マサシク王・臣ミヤコノ内ニテカ、ル亂ハ鳥羽院ノ御トキマデハナシ。カタジケナクアハレナルコトナリ。

と、鳥羽院崩御の後、保元の乱が勃発したことを述べ、そのような乱が鳥羽院の御代までなかつたことは「カタジケナクアハレナルコト」としている。鳥羽院は、本作品で王権の威徳がないとされ、史実でも王権が安泰でない時期の天皇であつた。

玉藻前説話の成立時期とされる南北朝時代前期も、持明院統と大覚寺統が交代で皇位に就く、天皇の王権が安泰とは言えない時期である。兩統迭立の争いが激しくなる中で、延慶元年（一二三〇）に即位した天皇に花園天皇がいる。大覚寺統の後二条天皇の急死に伴う即位で、天皇は十二歳であつた。即位以来、南都北嶺の訴訟に悩まされ、父伏見天皇と兄後伏見天皇の対立もあつて、持明院統として不利な立場に追い込まれる。文保の和談の後、伏見天皇の崩御により、文保二年（一二三二）、大覚寺統の尊治親王（後醍醐天皇）に譲位した。

政情の不安から逃れる拠り所として、天皇は仏教や学問に傾倒した。『花園天皇宸記』元応二年（一二三〇）正月二十一日条には次のような記事がある。

慈鎮和尚夢想記中、神璽所見注置云々、其旨相語、睽日來璽宮中所納之物不審、未分明之處、見日本紀之次、爲玉之由有所見、而近代人不知歟之間、分明口傳不審之處、今慈鎮和尚記符合、又後京極攝政、即此日本紀文、夢想之時、注送和尚之許云々、是趣已叶愚案、有興之間、件夢想記可注進之由仰之、

三種の神器のうち神璽が玉であることについて、自身が読んだ『日本書紀』と『慈鎮和尚夢想記』の記事が一致していると知り、

この夢想記を注進するよう命じている。『慈鎮和尚夢想記』とは、慈円が神璽と宝剣について見た夢を記録したもので、花園天皇の王権観に影響を与えた。その夢想には、神器と「性の力」の関わりが見える。

建仁三年六月二十二日晝の夢に云く、国王の御宝物、神璽宝剣、神璽、玉女也、此の玉女、妻後の体也。王自性清浄の玉女の体に入り交会せしめ給へ、能所共ニ罪無きか、此の故に神璽とは清浄ノ玉也ト（中略）不動刀鞘印は則ち是れ也、刀、宝剣也、王ノ体也、鞘、神璽也、后ノ体也。此の交会の義ヲ以て此の印成就するか。不動は専ら王と為るべきの本尊か。

慈円は神璽を妻の体、宝剣を王の体の隠喩とし、それらの交会の象徴が不動刀鞘印であるとする。これを読んでいた花園天皇は、神器すなわち宝物に「性の力」のイメージが付与されることを理解していたと推測できる。

天皇はまた、藤原頼長の日記『台記』を特に熱心に読んでいた。『花園天皇宸記』元亨四年（一二三四）二月十三日条では、保元の乱の首謀者である頼長を「此人近古才學優長之人也」と評しながら、「保元大乱爲謀首不能成事、其智所以不足稱也」と批判している。花園天皇は、後醍醐天皇による正中の変（一二三四）や元弘の変（一二三三～一二三三）などの混乱を恐れながらも『台記』から学ぶことで、保元の乱に類する大乱の勃発を防ごうとしていた。まさに玉藻前説話で描かれる時代に関心を持っていたのである。

本作品で描かれる鳥羽院の時代は、天皇の権威が不安定であつた

という点で、成立時期とされる南北朝時代前期と重ねられる。その時期の中でも、「性の力」と宝物、保元の乱について関心が深い花園天皇の時代に成立した可能性を指摘した。鳥羽院の時代に仮託して語られる本作品は、同じように天皇の権威が不安定であつた南北朝時代前期に求められ、成立した物語なのではないだろうか。

三 享受時期と享受の目的

「玉藻物語」「玉藻前物語」といった作品名が『実隆公記』などの公家日記の記事に見られることはすでに指摘され、玉藻前説話の成立時期を推定する資料として扱われている。本節では、それらの記事を活用し、天皇周辺の文化受容を踏まえながら本作品の享受の問題について考察する。

南北朝時代前期、王権の象徴の一つとして天皇家に継承された書物を相続し、文庫を擁した家に伏見宮家がある。伏見宮家は持明院統の崇仁親王を初代とし、三代貞成親王が文庫の維持、収書に尽力した。貞成親王は学問に熱心であり、『看聞日記』をはじめとする著作や物語の書写に積極的であつた。また、蔵書の点検や散佚防止のため蔵書目録を作成しており、幸いに『看聞日記』の紙背文書として残されている。そのうちの「物語目録」に「玉藻物語一帖」が見られるのである。伏見宮家は、初代から四代まで皇位継承から外れていたが、貞成親王の子後花園天皇が踐祚して皇位を継ぎ、その子孫は後土御門、後柏原、後奈良、正親町、後陽成と続く。以上の天皇の時代に記された日記記事を次に挙げる。

・『看聞日記』永享五年（一四三三）五月七日条

晴、御乳人又内裏參、双子十帖愚童記・五常内義抄・宝物集・玉藻物語、懇召進之¹⁸追被返下¹⁹、
(伏見宮文庫にあった双子十帖の中の「玉藻物語」などを、御乳人(庭田重有室・後花園天皇の乳母)を通じて後花園天皇に進上した)

・『実隆公記』 文明九年(二四七七)十一月廿五日条

己丑、陰、自^レ晚雨降。今日禁裏御双紙谷響集、玉藻前物語、つれく種、銘依^レ仰書進上之²⁰、
(三条西実隆が、後土御門天皇の仰せで禁裏にある御双紙のうち、「玉藻前物語」などの(表紙の)銘(外題・表題)を書き記し、進上した)

・『言繼卿記』 弘治三年(二五五七)三月二十一日条

次院家へ罷向。入麵一盞有^レ之。音曲本卅六冊・玉藻前物語・精進魚類物語等、見度之由被^レ申候間、遣^レ之、
(後奈良天皇が音曲本(謡本)三十六冊、「玉藻前物語」、「精進魚類物語」などを御覧になりたいとおっしゃるので、山科言繼が持参した)

・『言繼卿記』 永祿十年(二五六七)八月一日条

近衛殿上臈承候物語雙紙、玉藻前物語、堺記等持参了。
(近衛殿上臈女房が、正親町天皇のもとに「玉藻前物語」、「堺記」などを持参した)

・『言繼卿記』 天正十七年(二五八九)四月十六日条

一、西御方へ罷向了、御酒有^レ之。精進魚類物語返給了、又今御乳人二花鳥風月草子・玉¹⁹□物語求令借用了、
(山科言繼が後陽成天皇の乳母に、「花鳥風月草子」と「玉藻物語」を借用させた)

以上から、「玉藻物語」「玉藻前物語」が、乳母や側近の公家を通じて、伏見宮家出身の天皇に借用されていたことを指摘できる。また、以上の記事に見られる「五常内義抄」「宝物集」「堺記」が『看聞日記』の「物語目録」記載の書名と一致しており、伏見宮文庫の蔵書を、後花園天皇から後陽成天皇までの天皇が借用していたことが分かる。ではなぜ玉藻前説話が、室町時代後期から戦国時代にかけて天皇周辺で読み継がれていたのだろうか。

後花園天皇は、政治において正しい判断を下せるようにという父貞成親王の教えから、学問に熱心であった。三田村雅子氏²¹は、後花園天皇が『源氏物語』に関心を示していたことに注目し、「源氏物語の筋書きは、この父子にとって、まさにみずからの物語であり、希望を託してきた「神話」だったのである」と述べている。後花園天皇は皇位継承を外れていた伏見宮家の五代目であり、天皇としての權威は不安定であった。『源氏物語』は貞成親王と後花園天皇にとって、伏見宮家の王権回復を導くテキストだったのである。『源氏物語』同様、王権回復を描く物語である玉藻前説話にも、同じような意味が付与されていたと考えられよう。

後花園天皇の晩年、応仁の乱により朝廷は打撃を受ける。後土御門天皇は政務が行えなくなり、後柏原天皇、後奈良天皇の時代に

なっても財政難から朝儀すら行えていない。玉藻前説話は、皇位継承から外れていた過去があり、さらに応仁の乱の打撃で権威が低下していた天皇とその周辺の人々が、天皇の権威付けのために必要とした物語だと言える。

おわりに

玉藻前説話が保元の乱をめぐる史実を題材にしていること、三種の宝物が王権の象徴であることはすでに指摘されている。しかし、以上の内容が何の意味を持ち、なぜ本作品が成立したかということはありません論じられてこなかったように思う。

本稿では、三種の宝物の意味を探り、仏舍利・如意宝珠・針のそれぞれが、玉藻前と鳥羽院の「性の力」を表すものであると述べた。「性の力」にまつわる王権が描かれる理由としては花園天皇の文化受容を挙げ、成立時期と絡めて考察した。最後に公家日記の記事を中心に享受の問題に触れ、本作品が応仁の乱前後に天皇周辺で借用され、天皇の王権回復を示す物語として享受されたのではないかと述べた。

玉藻前説話は近世以降も発展し、江戸時代には、浄瑠璃『玉藻前職袂』、読み本『絵本三国妖婦伝』など、玉藻前の怪異性に重点を置いた娯楽作品が生まれている。田川くに子氏は、お伽草子の玉藻前は陰陽師に幣取り役をさせられるが、『三国妖婦伝』の玉藻前は陰陽師を説得させていることを指摘し、近世の玉藻前の方が主張や個性を持つ人格になっていると述べる。中世において玉藻前説話は天皇の権威付けのために必要とされたが、近世以降はその必要がなくなる。そのため、人々の興味が玉藻前の怪異性に移っていったの

ではないだろうか。

現代でも馴染みのある三国伝来・金毛九尾の妖狐の伝説は玉藻前の怪異性が注目されがちである。しかし中世においては、鳥羽院の時代に託して天皇の王権回復を主張するために成立し、それを確認するために享受されたと結論付けたい。

注(1) 美濃部重克「玉藻前」考(『伝承文学の視界』三弥井書店 一九八四年)

(2) 田中貴子『外法と愛法の中世』(平凡社 二〇〇六年)、濱中修『女神たちの中世物語』(新典社 二〇一二年)

(3) 京都大学蔵『むろまちものがたり』(臨川書店 二〇〇二年)。引用本文には、頼朝に白針を渡した部分がないが、確認した先行研究ではすべて白針が頼朝に渡ったとしている。本稿は諸本に限らない玉藻前説話を対象としたものであるため、白針は頼朝に渡ったとして論じた。

(4) 橋本初子「仏舍利勘計記」解題(『景山春樹「舍利信仰」その研究と史料』東京美術 一九八六年)

(5) 辻善之助『日本仏教史』第二巻・中世篇之一(岩波書店 一九四七年) 二九五～二九六頁。

(6) 細川涼一「王権と尼寺 中世女性と舍利信仰」(『女の中世 小野小町・巴・その他』日本エディタースクール出版部 一九八九年)。仏舍利を与えられた法華寺の尼としては、仏舍利を所持する聞勝という比丘尼から消失した仏舎利のありかを聞いた澄禪や、自らが所持する仏舎利の真偽を確かめるためそれを持った空如が挙げられる。

(7) 大橋直義「仏舍利相承説と〈家〉——十三世紀の歴史叙述——」(『日本文学』五二号 二〇〇三年七月)に系譜がまとめられている。

(8) 注(1)美濃部論文、小松和彦『日本妖怪異聞録』(小学館 一九九二年)

など。

- (9) 父伊予守藤原長実は受領であり、官廷社会では一段低く見られていた『今鏡』上・すべらぎの下第三の「男山」には「いとやんごとなき際にはあらねど」とある。
- (10) 阿部泰郎「宝珠と王権」(岩波講座東洋思想16『日本思想2』岩波書店 一九八九年)
- (11) 注(2)の演中論文では、如意輪観音(辰狐の化現)や鳥羽院が宝珠を持っていたことが指摘され、中村禎里「狐の日本史 古代・中世篇」(日本エディタースクール出版部 二〇〇一年)では、タキニ天が宝珠を持つっており、宝珠は仏舍利と同一視されるとある。
- (12) 注(11)中村論文。
- (13) 吉野裕子「狐 陰陽五行と稲荷信仰」(法政大学出版局 一九八〇年)
- (14) 三田村佳子「製鉄・鍛冶神事としての針供養―「コト八日」の一視点―」(『成城文芸』一五三号 一九九六年一月)
- (15) 青山幹哉「中世武士における官職の受容―武士の適応と官職の変質―」(『日本歴史』五七七号 一九九六年六月)、藤田佳希「王権から見た武士―武士・将種・兵」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』五九号 二〇一四年二月)
- (16) 橋本芳和「花園天皇の御学問」(『政治経済史学』三七〇号 一九九七年四月)
- (17) 大島由紀夫「『玉藻前』諸本をめぐって(二)―陽明文庫本を中心として―」(『伝承文学研究』四一号 一九九三年三月)など。
- (18) 「看聞日記」卷七応永廿八年正月―十二月紙背文書(『圖書寮叢刊』『看聞日記紙背文書・別記』養徳社 一九六五年)、飯倉晴武『日本中世の政治と史料』(吉川弘文館 二〇〇三年)にも紹介される。
- (19) 引用した大日本古記録には「重ネ書ノ為不明」とあるが、東京大学史料編纂所の所蔵資料目録データベースのデジタル画像を確認するに
- 「藻」と読める可能性がある。
- (20) (18)に同じ。
- (21) 三田村雅子「(記憶)の中の源氏物語(16) 後花園天皇の王権回復」(『新潮』一〇二二号 二〇〇五年一〇月)
- (22) 田川くに子「二つの妖狐譚―「妖婦伝」と『玉藻前』について」(『文藝論叢』一四号 一九七八年三月)
- 引用文献
- 『東宝記』(東宝記刊行会 一九八二年)
- 『法華経鸞林拾葉鈔』三(臨川書店 一九九一年)
- 『溪風拾葉集』(『大蔵経』大正一切経刊行会 一九三一年)
- 『天台大師全集 魔訶止観四』(日本仏書刊行会 一九六九年)
- 校註日本文学大系『源平盛衰記』下(国民国書株式会社 一九二六年)
- 新編日本古典文学全集『平家物語』(小学館 一九九四年)
- 日本古典文学大系『愚管抄』(岩波書店 一九六七年)
- 宮内庁書陵部編・刊「花園天皇宸記」(複製) 卷十七、卷二十八(二〇〇一年、二〇〇九年)
- 『慈鎮和尚夢想記』(水上文義『台密思想形成の研究』春秋社 二〇〇八年)
- 圖書寮叢刊『看聞日記』七(明治書院 二〇一四年)
- 『實隆公記』卷一ノ上(群書類従完成会 一九三二年)
- 『言繼卿記』卷四(大洋社 一九四一年)
- 大日本古記録『言経卿記』三(岩波書店 一九九一年)